
異国の少女

沙綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異国の少女

【著者名】

NZマーク

1

【作者名】 沙綺

【あらすじ】

夏と不思議な異国の少女の話。

私は最近知ったことなのだが、私の家の近くに清冽な泉が湧き出しているという。

湧き出す水は太陽の光を受けてきらきらと輝き、その縁からこぼれ落ちる水は美しいのだという。

夏の朝である。

私は散歩がてらにその泉へ行ってみることにした。

その泉は相当昔からあるのか、井桁の周りが深い緑色の苔で覆われており涼しさのような気持ちはを感じさせた。

近くに滝もあるのだろうか、心地よい音が鳴り響いている。

小鳥のさえずりか、楽しげな声まで聞こえてきた。

数人の少女である。近くの子供たちだろうか。

「今日も暑いわね。体が干上がってしまいそうだわ

「早く行きましょうよ。のどが渴いてしまったわ」

「ちょっとお待ちになつて。ここは石が多くて歩きにくくてよ

先頭を白いワンピースを着た少女がやってくる。およそ現代の少女とは思えない言葉遣いのは、どこぞのお屋敷のお嬢様だということであろうか。

少し遅れてやつてくる少女はひまわり柄の浴衣を着ている。しみじみと夏なのだと感じられる。

「あら、先客がいるようね」

「本当、珍しいこと」

水を飲みに来たのだろうか。

私は少女たちに「お先にどうぞ」と声を掛ける。少女たちは先を争つように泉に駆け寄る。その数は七人。

どの少女も赤いリボンをつけている。姉妹という感じではないの

で友達である。

ある少女は浴衣の袖が濡れないように気を配りながら、またある少女は心地よい風を感じながら泉を見ている。

雲ひとつない夏の朝の空を通り抜けた朝日の中が、私や少女たちに降り注ぐ。

赤いリボンが美しく見えるほどの光である。

一人の少女がおもむろに湧き出る水へ手を伸ばす。

「あら、とても冷たいこと」

「まあ、私もさわってみようかしら」

「こんなに冷たいのならラムネでも持ってきて冷やせばよかつたわね」

「そういえばのどが渴いたわね」

「ええ。こここの水は飲めるのかしら」

「お母様が大丈夫だと言っていたわ。こここの水は冷たくて美味しいと。今日はコップを持ってきてよ」

「まあ、では早速飲みましょう」

「ええ、そうしましょう」

一人の少女が取り出したのはいかにも高級そうな、銀のコップである。それで水を飲むのは冷たそうである。

その銀のコップも朝日を受けてきらきらと光っている。

あまりのまぶしさに思わず目をそむけてしまった。

少女たちは「キヤキヤ」と小さな悲鳴を上げながら泉から水をすくい、その紅い唇を潤す。

私は手ごろな岩に座り、ただその光景を眺めている。

何を考えていたわけでもない。

ただこういった日常的な風景は心休まるのである。

蝉の声がしだいに大きくなり、少し暑さも感じてきたが、少女たちはそんなことをお構いもなく、零れ落ちる水と戯れている。

風が木々を揺らす乾いた音が、水の流れる音が、夏の虫たちの命の声が、少女たちの楽しげな声が聞こえる。心地よく聞こえる。

カサツ

と後ろから草を、小石を踏む音が聞こえる。
また誰かが来たのであろうか。

ポチヤン、と水の跳ねる音。この泉も人が来たことに喜んでいるのだろうか。

振り返つてみるとそこには異国の少女。

ブロンドの長い髪を黒いリボンで束ねた少女である。
私が見ていることに気付いたかの少女は私に微笑む。
純白の肌のなかに浮かぶ二つの碧い瞳。

肌とのコントラストの美しい紅い唇。

また、その白く美しい肌を際立せているのが、彼女の着る蒼い和服である。

「」の異国の中には、異國の人は初めてなのだろうか、やはり珍しそうに彼女のことを見ている。

異国の少女は懐から地味な色の湯のみを出した。

少女たちが持っている銀色のコップとは対極に位置する地味な湯のみだった。

異国の少女はブロンドの長い髪を揺らしながら泉に歩み寄る。

少女たちは異國の少女に道をあける。一人の少女が口を開いた。

「ずいぶん粗末な湯のみですわね」

「あら本当。粗末ねえ」

「異国の方が和服を着ていらっしゃるわ」

「粗末な湯のみに良くお似合いだ」と

一度鳴き出したら次から次へと鳴き始める蝉のように、少女たちは異国の少女への批判を言い始めた。

銀のコップを持った少女が言つ。

「その薄汚い湯のみをこちらにお渡しになつて。それは水を飲むの

に小さいから、このコップで飲むといいわ

どんなつもりで異国の少女が言ったのか。笑いながら異国の少女に言つ姿は少し嘲りの影が見えた。

私は耐え切れなくなり、立ち上がり少女性たちを叱りついた。しかし、異国の少女が私に気付く、静止の意思を私に見せる。

微笑が、私に彼女の意思を伝える。

異国の少女がその碧い瞳を前に向ける。

蝉が一囁鳴き止んだ。

この場の空気が変わる。異国の少女の瞳が一度、風に漂つ。

「ほら、このコップを貸してあげると言つてこられるのよ」

そう言つて銀のコップを差し出す。

異国の少女はもちろん、それを受け取らず固くむずんでいた紅い唇を開く。

“ M O N . V E R R E . N - E S T . P A S . G R A N D .
M A I S . J E . B O I S . D A N S . M O N . V E
R R E ”

ゆづくと、しかし力強い声だつた。

「私のグラスは大きくはありませんが、私は自分のグラスで戴きます」と言つたのである。

ミコッセの言葉である。

言葉が通じないので、少女性たちは互いに顔を見つめ不思議がつてゐる。

言葉が通じなくても彼女の言いたいことは少女性たちにわかつと分かっただろう。

かの銀のコップを差し出した少女はそれを仕舞う。

異国の少女の湯のみとは似ても似つかない銀のコップを仕舞う。

異国の少女は地味な色の湯のみを泉に浸し、乾いた紅い唇を潤した。

“ C e t t e e a u e s t d ? l i c i e u s e ”

「この水は美味しいですわね」と囁いた。

異国の少女は帰る。

途中、私の方を振り向く。

碧い瞳がまた私を見つめる。

蝉の声で搔き消されそうな小さな声で言いつ。

ありがとうございます。またお会いしましょ、と。

日がまた少し高くなり、風も少し暑さが増してきた。
もし、本当にまた会えるのだったら、彼女に私はいつまでも

う。

「またあの泉に行きませんか」と。

(後書き)

私が森鷗外に興味を持ったのはやはり舞姫といつ作品からです。森鷗外氏の作品には惹かれるものがあり、それ以降色々な作品を読んできました。

中でもこの題材とした「杯」は私の中で一番好きな話です。

今回書かせてもらった作品の設定は「杯」の後の時代、黄金色の髪の持ち主の子孫（作中：異国の少女）が泉に訪れるものです。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024m/>

異国の少女

2010年10月8日14時10分発行